

菅野 達雄 亘理町教育委員会 生涯学習課 副班長

0. はじめに

東日本大震災において、亘理町は沿岸地域が壊滅的な被害を受けた。なかでも江戸時代から水運の拠点として、また、漁港として栄えた荒浜地区には貴重な資料を所有していた旧家が多く、緊急のレスキューが必要だった。平成23年には5月から7月にかけて救援委員会、宮城歴史資料保存ネットワークの協力を得て、江戸時代に浦役人であったM家と明治時代から昭和初期にかけての豪商であったE家のレスキュー活動を行った。レスキューした資料は古文書、書画、調度品、祖先が残したコレクション品など膨大な数に及んだ。乾燥後、亘理町立郷土資料館の収蔵庫と、隣接する角田市の協力を得て市の施設に保管した。

平成24年度には、この2軒に残されていた書籍や陶磁器などの資料を亘理町単独でレスキューした。

1. 保管状況

水損した資料についてはレスキュー後、3ヶ月ほどかけて郷土資料館内で自然乾燥させた。他の収蔵資料への影響を考えると収蔵庫に保管するべきではないことは理解していたが、町内に一括して保管ができる空調の整った施設は



パック作業の様子

なく、水損資料については土器類を置いている収蔵庫に保管した。その他については水損していない書画は特別収蔵庫に、水損していない書籍類と民具は角田市の施設にそれぞれ保管した。

水損した資料を保管した収蔵庫の空調は油炊冷温水発生機で温度の調整し、空気調和機で送風するタイプである。重油を使用するため、警備員が不在になる夜間は空調ができない。通常は8:00～18:00までの空調となっている。冬を越えたころは特に変化はなかったが、梅雨の時期になると状況は一変した。収蔵庫がカビの臭いで充満されたのである。新たにカビが発生したことが分かり、このまま放置してはレスキュー資料ばかりでなく、他の資料への影響が心配された。

このことを東北歴史博物館、宮城県文化財保護課と相談すると、進めていた資料分類作業と並行して脱酸素剤を用いたシーリングによる資料の封じ込めが有効ではないかと勧められ、水損資料のすべてについて一点ずつパックした。また、11月には全館くん蒸を実施し、殺虫殺菌作業を行った。

2. 整理状況

レスキューした資料の種類は多岐にわたり、また、膨大な数であり、さらに、水損している資料も多かったため、何をどのように、どう進めていけばよいのか判断に苦しんだ。しかし、このままでは資料の劣化も予想できたことから、まずはどのような資料があるのかを把握することから始めた。この作業は平成24年1月から始め、3ヶ月かけておおその資料について、その内容と状態を確認した。M家の資料は古文書が、E家の資料については商売に関する文書・台帳類、書籍、書画などが中心であった。M家の資料は水損もなく、状態が悪いものは少なかった。E家については書籍、書画で水損したものが多く、レスキュー以降に発生したカビも認められた。そのため、E家の資料整理を優先することにして作業に入った。



海水に浸かった錦絵 カビが無数に発生した

はじめに手をつけたのが明治から昭和期にかけての文書類であった。ドライクリーニングを行った後、エタノールによる殺菌と水洗いをして乾燥させた。水損の酷かったものについては乾燥時にくっついて離れなくなってしまったものも多かった。剥がしきれないものについては無理に剥がさずそのままの状態での保管した。

書籍類、書画類については状況の再確認と資料内容の調査が必要だった。そこでE家独自の分類項目と調査項目を組み、資料カードを作成して作業にあたった。調査後、水損したものとカビの発生が予想されるものについては全て脱酸素剤を封入しパック詰めした。現在もその作業は続けている。

3. 今後の取り組みについて

レスキューした資料については一時保管を行っているが、保管場所の増強が必要である。当館の収蔵庫はレスキュー資料を収蔵する前の段階ですでに満杯の状態になっていた。これについては収蔵庫の改装で対応できると思われる。ただし、改装には建築基準法や消防法などクリアすべき課題もあるため、慎重に進めなければならない。

次に、E家の資料で水損した資料の保存と修復が今後の大きな課題になってくるとされる。現在は脱酸素剤を封入してパックした状態であるが、いつまでもこのままにしておくわけにはいかない。将来の保存に向けた取り組みが必要である。

修復についてだが、全点修復するに越したことはないが、



E家資料の一部 段ボール 200箱に及ぶ

膨大な数になるだけに、費用や期間等を考えれば非常に困難である。どの資料を優先すべきか、その資料にどのような価値があるのか、その判断に迷うこともある。資料は多岐にわたり、真贋の見極めも必要である。修復方法や手順なども考えなければならない。これらの課題に取り組むには文化財保存修復学会をはじめ、その分野に精通した研究機関・研究者、東北歴史博物館、宮城県文化財保護課など、多くの機関と関係者の協力が不可欠である。期間を要することであるが指導・支援をいただきながら、協議・検討を重ね、最善の対応に努めていきたいと考えている。